

「わかる」ということのわかりなおし

教育研究所所長 佐伯 胖

研究所の研修で研究員がしばしば口にするのは、「これまで子どもについて、ぜんぜんわかっていなかった」ということである。つまり、これまでは、「この子は(教科内容について)どこまでわかっているか、どこがわかっていないのか」がわかれば、子どものことがわかっている教師なのだと思っていた。しかし、研修では「そのときその子は何を感じ、何を考え、何を知らうとしているかをていねいに捉えること」が要求される。これまでそんなことは、考えてみることをすましてこなかったというのである。

これは「わかる」ということのわかりなおしである。

このわかりなおしは2つある。

第一のわかりなおしは、子どもという存在についてのわかりなおしである。つまり、子どもという存在を「教えるべき対象」として見て、「教えたいこと」を基準にしてそれがどこまでわかってくれたかに関心をよせるという、教師の子どもについてのわかり方である。これが間違いだったというしだいである。そうではなく、まず、子どもという存在を、その子なりに(よく)生きようとしている人間としてみるのである。こちらが教えようとしていることを基準にどこまで達成したかを評価するまなざしを捨てて、子どもが(人間として)よく生きたいという願いをもとに、そのときそのときの場面(事態)の中で、「その子は何を感じ、何を考え、何を知らうとしているかをていねいに捉えること」が本当の子ども理解なのだというわかりなおしである。

第二のわかりなおしは、「子どもが何か(ふと気づいたこと)について『わかる過程(プロセス)』を、次のようなプロセスとしてわかるということである。

- ① わかりたいことの発見(「あっ、そのこと、わかりたいな!」と思うこと)。
- ② 少しずつわかっていくこと(「それって、もしかして、こういうこと?」)。
- ③ わからないことの発見(「もしも、こうだとしたら?」がいろいろ生まれる)。
- ④ 「たしかにほんただ」と思いたい(「納得したい」)願い。
- ⑤ 本当の納得(「これこそが、ホントにホントだ!」)。

以上のプロセスを子どもともに、わくわくしながらたどるというわかりなおしである。

本紀要を通して、研究員のわかりなおしについて、読者自身もわかりなおしただけであれば幸いである。